

ヒロシマ音楽譜

作品が紡ぐ復興

⑩

その歌の名は「ねがいで」。2002年3月、広島市内の中学校から発信された歌は、8年間で歌詞が2千番を超すというユニークな現象をみた。発端は、社会科教諭を務めていた横山基晴の発案。横山は平和学習で

って作曲されたこの歌は、やがて、神戸の中学校英語科教諭、長田寿和子の耳にも入る。創作の経緯や歌詞内容に共鳴した長田は、自らが関わる国際教育機関のホームページ上で英訳付きの歌を紹介した。すると、世界各地

「ねがい」

生徒が書いた平和宣言や感想文などを集め、交流のあった広島合唱団に歌詞の編さんと作曲を依頼していた。

山ノ木竹志による編から現地の言葉に翻訳された歌の音源が届くよう

一つの旋律 結んだ思い



平和記念公園の原爆の子の像の前で「ねがい」を歌う
広島市内の中学生=2011年5月26日(横山教諭提供)

世界から2060編の歌詞

なかつた歌詞に5番目の歌詞の作詞を呼びかけた

人々のさまざまな願いを伝える歌。ただし要と

(能登原由美・広島大特任助教) 〓おわり

ところ、さらに大きな反響を呼んだ。さまざまな言語による5番目の歌詞が続々と届き、2010年には世界31カ国から寄せられた歌詞が2060番にまで到達するのである。

「もしもこの頭上に落とされたものが、ミサイルではなく本やノートであったなら」「君は戦うことをやめるだろう」。21世紀に入ってから10年余り。そのわずかな間にも、米中枢同時テロ、イラク戦争、東日本震災、福島第1原発事故など、日本の歌詞には、戦争、貧困、人権、環境問題、差別やいじめなど、それぞれ別の作者が「もしも」と願う内容が多岐にわたって含まれる。

なるメロディーは一つ。グローバル化・多様化が進む中、他人の言葉ではなく自分の言葉で表現できることが共感を呼ぶだろう。その一方で、現代人は人とのつながりも求める。2060編もの歌詞を結ぶメロディーは、その役割を果たしているのかもしれない。